

令和7年9月総評

西躰 かずよし

真夜中に近くバイクが轟いて
ねむれなくても生きてていいよ

うたた 岡山県

夜のバイクの轟音に取り残される語り手。それと生きていることに対するうしろめたさのようなもの。そして語り手の救済へとつながる「生きてていいよ」ということば。

バファリンを
インドの友と分けあって
今日も世界はとてもやさしい

櫻川 佳子 愛媛県

今日も世界のやさしさを確認する。バファリンをインドの友だちと分けあうという簡単な方法で。僕たちは、いつもちっぽけなことに世界のやさしさを見つけたりする。
薬と、外国人のともだちと。そして変わらない僕たち。

まなうらの夜が崩れて
事故現場に散らばる
ガラスのような雪

常田 瑛子 山口県

事故現場の雪に見惚れているようにも見える。描かれるのは、ふだんの夜と、突然の事故との不穏な対比。夜に日常の崩壊の予感が重なる。凶器にもなりえるガラスのような雪が暗闇のなかで光る。

流れ星家族になるはずだったひと

木村 菜智 宮城県

なるはずだったということばには、喪失がある。生まれるはずだった、結婚するはずだった、というように。たぶん家族の喪失は、かなわなかった願望として整理できるほど、簡単なものではないのかもしれない。

失われることで輪郭を帯びる家族のかたち。その喪失のかけがえのなさが、作品の救済にもなっている。

ドラムセットのいちいんでしたか

牛田 悠貴 東京都

この作品が、こんなにもやさしく感じられるのは、もういないその子が、どうしてもドラムセットのいちいんになれなかったからかもしれません。

でも、それはひとつの仮定に過ぎません。こんどは、あなたにとっての「いちいん」をさがしてみてください。

これからも俳句がすきと君が言う

白桃洗う朝のあかるさ

齊藤 栞 埼玉県

これからもすきと言うには、今後も決して変わらないという確信が必要だろう。けれど僕たちは、そうした確信が、いつきのものでしかないことを嫌というほど知っている。

それでも「白桃洗う朝のあかるさ」と書くのは、その一瞬が不変の、取替えのきかないものであることを分かっているからなのだろう。

唾液すこしあまい

八月十五日

早瀬はづき 大阪府

8月15日の終戦記念日の唾液をあまいと言う。それも、すこし。そのあまさは、たまたま争いのない場所に生きる、僕らのことを思い起こさせる。

かつて命を投げ出したものへの約束を忘却するために。そして確かに忘却したと伝えるために。その罪への意識が、僕らの唾液を、いつもよりあまいものにするのかもしい。

ぱ らいそに咲く

ぱ ふしぎな花を

ぱ 君と手折れば

ぱ

野城 知里 埼玉県

歌は、「ぱ らいそ」からはじまって、「ぱ」でおわる。そのとうめいな響きだけを残して。この世にはない楽園で、君との瞬間を刻むように。もう手折る花は残っていないかのように。

花がひらくとき

の

彩度で語られて

えいがは金のオルガンとなる

さいう 石川県

ここに描かれる「えいが」は実感を伴うものとして存在する。たとえば語られるであろう花として。たとえばひとつのオルガンとして。

「えいが」の色彩は、やがて久遠の音を想起させる金のオルガンへと変わり、より筆者

の信じる真実へと近づいていく。それらの物語を抱きしめるとき、新たに生まれるものがあるに違いない。

垣に花ともだちみんな院進す

白波瀬郁夫 東京都

語り手もみんなと大学院に進みたかったんだと思う。ともだちと歩んできた道を、いっしょに歩めなくなったときの、ぽつんとした感じ。花がどんなに美しくても語り手の状況が変わることはない。ただ花への視線だけが、ことばでは表現できない、語り手の複雑な心境を読者に伝える。